

2025年度明治大学教育会研究大会 分科会概要

第1分科会

新課程対応大学入学共通テストを終えて「公共」をどう授業するか。

森 一将 先生（学校法人平山学園清林館高等学校・中学校）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

令和7年度大学入学共通テストを終えて新課程科目「公共」をどう講義していくかを、アクティブラーニングを通して教職課程の学生のみならず現役の教職員の方々と探求していく。公民科目のカリキュラムマネジメントを担当する立場から、多様な意見をファシリテーションしていく。

第2分科会

地域創生とインクルーシブ教育を取り入れた学校デザインについて

藤田 純子 先生（新潟県立見附高等学校）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

15歳人口の減少により、地方の県立高校では統廃合が進んでいる。勤務校においても存続を課題として、魅力化・特色化を推進し、選ばれる学校づくりをしていかななくてはならない。

地方の小規模化した普通高校が、いかにして地方都市や地元の産業、地元の国公立大学と連携し、0ベースから新たな魅力づくりを始めていったのか、その挑戦について紹介したい。

第3分科会

教師と社会人が連携して複数校がオンラインを利用した総合的な探究の時間のプログラム作り

菅原 幹夫 先生（東京都立板橋高等学校）

深井 恒太郎 先生（NPO法人タテイト代表）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

2022年度から教師と社会人が連携して総合的な探究の時間のプログラム作りを行なっている。これはキャリア教育の要素を持ちながら、総合的な探究の時間の狙いに即した授業内容となっている。教師と社会人がそれぞれの視点で「生徒のために何が必要か」「どう言う力を身につけさせたいか」そして、「課題解決能力」「課題発見能力」を身につけさせるには「どのようなプログラムを提供すべきか」をテーマにプログラム作りを行い、校内調整を行い、日々授業実践に取り組んでいる。

第4分科会

高校生にどうリスクを教えるか？～投資ノウハウ教育からの脱却～

高橋 勝也 先生（名古屋経済大学）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

新設された高等学校公民科「公共」では、学習指導要領解説において「様々な金融商品を活用した資産運用にともなうリスクとリターンなどについて、身近で具体的な事例を通して理解できるようにすることも大切である。」と示している。しかし、多くの教科書では、預貯金はローリスク・ローリターン、株式はハイリスク・ハイリターンなどと図を活用して示しており、株式を伴う資産運用は慎重にやるべきであるという論調になっている。金融において投資について教える必要はあるものの、「公共」教科書の記述が金融のしくみと資産運用中心となってしまう、学習指導要領解説が示す身近で具体的な事例を通して理解できる構造になっていない可能性がある。加えて、投資未経験者として、リスクとリターンの関係を先述の図を用いて説明することしかできないと悩みを打ち明ける教員も周りに存在する。本研究は、どのように高校生にリスクを教えたらいのかという授業実践の積み重ねをベースとしている。高校教員に金融の知識がなくとも実践可能であり、かつ生徒にリスクとリターンの関係を身近な題材でわかりやすい授業実践を紹介する。

第 5 分科会

戦後 80 年と歴史教育－歴史総合の実践から考える－

山下 達也 先生（明治大学文学部）

根本 太一郎 先生（土浦日本大学中等教育学校）

高野 晃多 先生（佼成学園女子中学高等学校）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

今日、日本の中等教育ではいかなる歴史教育が求められ、また、実践されているのか。本分科会では、近現代史に主眼を置く「歴史総合」の可能性と課題について、具体的な実践例を通じて論究する。

その際、2025 年が戦後 80 年の節目となることを踏まえ、アジア・太平洋戦争に関連するテーマの実践に着目する。「戦争」をめぐる政治的・文化的諸相の把握や理解を深めるためには、教科書の記述に触れるだけでは充分とはいえない。学習指導要領が明示する、「多面的・多角的な考察や深い理解」の成否は、教員たちによる授業デザインと実践に委ねられているといってもよい。

ややもすれば、踏み込んだ実践が避けられがち、短時間で済まされがちな「戦争」に関するテーマであるが、「現代的な諸課題の形成について歴史的観点から考察」することを目指す歴史総合のなかにあつては、極めて重要かつ恰好のテーマと捉えることもできよう。以上の点を踏まえ、本分科会では 2 名の現職教員による実践についての報告と検討を行う。戦後 80 年の節目に、今後の歴史教育について議論したい。

第 6 分科会

学校における働き方改革の進捗状況 ～授業改善と業務改善の視点から～

永井 崇 先生（福島市立鳥川小学校）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

学校における働き方改革が叫ばれる中、現在の学校の教職員の勤務実態が大変気になるところである。特に、ここ数年、教職を目指そうという学生等が少なくなったり、採用されても志半ばで退職して

しまったりする教員の影響があり、教職員の働き方を抜本的に変えようと行政と学校現場が連携し、学校の働き方改革に大きな力を注いできているところである。そこで、実際、具体的にどのような取り組みや働き方改革を行政や学校独自で実施しているのか、また、その成果としてどのような変化や結果がみられるのか。これまでの取り組みからの成果と課題についても紹介する中で、教員の今後の働き方について共に考えたい。併せて、働き方改革に繋がるといわれている授業づくりとはどのようなものか。併せて「主体的・対話的で深い学び」の授業の実現に向けた授業づくり等、令和の授業の在り方についても実践例を取り上げ、これから教職を目指す方や、授業を変えたい等と思っている先生方にとっての授業づくりをする上での一助となるような機会としたい。

昨年度まで教育委員会という行政側に勤務し、「働き方改革を推進していた立場」と今年度から学校現場に復帰し、「学校現場で一人の教員に戻っての立場」の両面を経験したからこそ見えてきた今後の学校運営の在り方について紹介したい。

第7分科会

読解と部分作文による、考える授業 ～読み書きを通して、知識学習を思考力・判断力・表現力につなげる～

渡邊 博司 先生（スイス公文学園高等部 2019年退職）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

■ねらい

我が国では習得型の教育から探求型の教育への変革が進んでおり、授業-学習の形態に変化が起きています。しかし、応用的な力をつけさせるのにはどうしたら良いのか、知識や技術のための学習はどこまでやれば良いのか、疑問も残り混乱も見られます。この中にあって、次のことを再確認します。

■仮説：

思考力・判断力・表現力などの新しい学力を身につけるには、知識・技能、読解力や数理能力などの基礎学力を確実にし、これを十分に習熟し活用することが最も大切である。

■この仮説に基づいて組み立てた授業の紹介

□基礎学力を新しい学力につなげるための二つのプロセス

①読み書きによって知識を深める

②読み書きによって知識の活用を進め、思考力・判断力につなげる

□授業の方法

●授業のモジュール化：

読み書きの作業量を確保し、繰り返して思考を深める

1回の授業は次の三つのモジュールからなる

○Preview

既習内容を今回につなげる

テーマの意味を生活周辺から捉えておく

教科書の記述を先習

○Work

Preview内容を本時の中心概念につなげる

中心概念の理解を中心に

○Review

本時の内容を自己確認

新知識を深める、活用する

●ネットワークの活用：情報へのアクセス、情報の交換で思考を広げる

ファイル共有システムを利用して資料配布、課題発出・回収、共有、討論、作成

第8分科会

学びの最前線～実社会に挑む生徒たち～

和辻 龍 先生（明治大学附属中野中学高等学校）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

学校のカリキュラムではなく、委員会でもなく、ボランティア活動でもない、「実社会」において生徒たちが各々の長所を発揮して、企業の要望に応える事で成果を作った実録報告です。

活躍したい人がやりたい事をやりたいだけ挑戦できる場において、いかにして生徒たちが活躍するに至ったか、下記の2つの事例をもとに背景から成果まで報告します。

・紀伊國屋書店における講演会の企画運営

・哲学・科学書出版社における新雑誌創刊号の編集

第 9 分科会

これからの教育のあり方について（教員を取り巻く現状と課題）

櫛野 治和 先生（東京都立葛飾総合高等学校）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

ブラックと言われ、採用倍率が年々低下していく中で、希望のもてる学校にするにはどうしたらいいのか？パラダイムシフト期における学校経営のあり方と東京都における教育の現状と課題について皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

第 10 分科会

「正解」は誰が決めるのか—記述式評価と AI のあいだで考える

田中 則仁 先生・小野塚 美保 先生（日本学園）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

学校における評価は、学びの方向を示すだけでなく、生徒の自己認識や社会との関わり方にも影響を与える。特に社会科では、「どのような見方や考え方が妥当か」を問い、個々の価値判断や論理的思考に向き合う記述式問題が重視されている。しかし現場では、限られた時間や採点負担の中で、丁寧なフィードバックを行うことが難しいという現実がある。近年では「主体性」や「探究性」などの目に見えにくい力も評価の対象となり、その妥当性や、評価結果に対する生徒の理解・納得をどう確保するかが課題となっている。こうした状況に対し、教師の主観を否定するのではなく、日常的に行っている判断を可視化し、生徒や同僚と共有できるようにすることが、「評価とは何か」を問い直すための一つの足場となる。こうした課題に対する一つの手立てとして、本発表では、AI を活用した記述式評価支援アプリの試作を紹介する。設問と配点を入力すれば、AI が模範解答とルーブリックを自動生成し、生徒の手書き解答を OCR で読み取って採点・フィードバックを行う。反論と再評価の機能も含め、評価の対話性を高める仕組みを試行している。

第 1 1 分科会

中学校道徳教科書にみるマイノリティー表象の傾向と課題

WANG YIREN さん（明治大学大学院生）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

近年、多様性の尊重や共生社会の実現が教育現場において重要視される中で、「特別の教科 道徳」におけるマイノリティーの表象はどのように変化しているのかが問われている。本研究では、日本の主要 7 社が発行する中学校道徳教科書を対象に、「障害者」「外国人・移民」「少数民族」「LGBTQ+」「貧困・経済的弱者」などのカテゴリに基づき、教材の出現頻度および描写傾向を量的・質的に分析する。

第 1 2 分科会（1）

科目と学年の壁を越えた協働のススメ～新任教員・大学院生の話も交えて～

津田 ひろみ 先生（神奈川大学、武蔵大学）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

英語の授業はこうにやるもの、国語の授業であればこんな感じ、数学の授業であれば・・・と、私たちは教科ごとに異なる授業のイメージを持っています。教員研修も教科ごとに行われ、校内授業研究会での発言者も同じ教科の先生に限られる……。しかし、科目や学年の壁で仕切られた授業のイメージが授業の根本的な見直しを阻むということはないでしょうか。今回は、新任教員と大学院生のお話も交えながらこの問題を考えてみます。いろんな教科の方の参加をお待ちしています。

土屋拓己（埼玉県高校教員）「新任として教壇に立つ責任の重み」

永野百合愛（明治大学大学院生）「教科横断授業の提案：数学科×英語科」

第 1 2 分科会（2）

若手英語教師の課題にどう取り組むか？

津田 ひろみ 先生（神奈川大学、武蔵大学）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

中 1 の時点ですでに英語に苦手意識を持っている生徒がいる、コミュニケーション中心の授業といっても、積極的な参加が難しい生徒がいる、オール・イングリッシュでやるべきという方針の中で文法事項をどう扱ったらいいか等々、若手の英語教師の悩みは尽きません。ゲストスピーカーも交えて、これらの問題への対応策を考えます。このコマから参加することもできますが、1 コマ目から参加すると、趣旨がさらにつかみやすくなります。

第 1 3 分科会

高校数学の導入問題を作ろう！

佐藤 英二 先生（明治大学文学部）

〔発表場所〕 明治大学駿河台キャンパス

〔発表概要〕

中学校の数学教科書には、どの単元にも導入問題があります。その単元で扱う定理を実験的に見つけるような、探索的活動を含む問題です。導入問題は、1920 年来の教育改革の中で、新しい単元を学ぶ意義を生徒に感じてもらうために教師たちが開発したものです。その教育改革は次第に上の学年に及び、1940 年代の旧制中学校 4 年生の教科書には、積分の単元にも導入問題が入りました。今日、高校の教科書に導入問題らしきものはありませんが、それは、高校では単元の導入に工夫する必要がないということではなく、戦後の混乱期に戦前の教育の知恵が失われた結果なのです。

そこで今回、高校の導入問題を現職の先生方と共同開発する企画を立てました。さしあたり、2 次関数、三角比、複素数、対数関数等について導入問題の種が見つっていますが、まだ多くの単元が残っています。実践の積み重ねも必要です。この企画に参加したい方はぜひ分科会においでください（いずれ学会発表等を行いたいと思っています）。

以 上